

子供の頃から作文が苦手だった。

国語自体は好きで読書もよくしたし作者の気持ちを考えるなども頭の中では答えが浮かぶのに、それを文章で書き表すとなると途端に語彙力が落ち脳がフリーズする。

大学入試には論文もあるのにこのままではまずいと思い、高三の夏休みにある新鋭作家のデビュー作を買った。

風羽舞音（かぎはまいね）二十二歳、男性作家。

手に取ったきっかけとしては本屋さんのランキングコーナーで一位だったことと新人賞総なめと称されていたこと、名だたる評論家たちが絶賛しているならきっと参考になるだろう……くらいの軽い気持ちだった。映画化も決定みたいだし。

けれど読みだした数分後にはもう、物語の世界に飛び込んでいた。自分では使ったことのない表現なのに何故かすんなり情景が浮かぶ。

美しい日本語、美しい文章とはこういうことかと感動した。

最後まで読み終え、世界から抜け出るのがもったいなくてページを持つ指が震えていた私の目に著者近影が飛び込んだ。

男の人に対して『美しい』という感想を抱き、見惚れるのは初めてだ。

陽の光に輝く絹糸を思わせる色素の薄い髪。焦げ茶の瞳が柔らかく弧を描き、スッと通った鼻筋に続くのは花びらをあてたかのような淡い色の唇。儚げな微笑みは慈悲を感じるとともにどこか色気も含んでいる。

とにかく美の化身。もはや神。誰が見てもなんかもうすごい崇めたいレベルの超絶美青年過ぎて今培ったばかりの語彙力もすぐに溶けた。

そこから風羽先生の大ファンとなり、新作は発売日に読破。インタビューはどんなマイナー雑誌でも本屋を巡り歩いて購入。聖地巡り。実写化作品は純粋に鑑賞というよりも、いかに先生の描写が汲み取られ再現されているかをチェック……と少々ヤバイ域に達しつつも充実した毎日を送り、その間に無事大学も合格し勉学と推し活に勤しんでいたある日、運命を変える出来事があった。

大学近くの商店街にある古びた喫茶店の外観が先生のデビュー作に出てくるお店と雰囲気が似ていることに気づき、フラッと入ってみた。

気さくで穏やかなマスターと話が弾み、何度か通ううちに常連さんとも話をするようになり、やがて「ここでバイトをしないか」と誘われた。今までは娘さんが手伝っていたが、

ちょうど私が通い始める前に結婚し引越してしまっただけ。

そう繁盛しているわけじゃないし給与も高い方じゃないけど……と言われたが、神作品の世界観に似た場所で働ける方が嬉しくて二つ返事で承し早速働き始めた。

マスターの言う通りお客さんはお世辞にも多くはないけれど、静かな空間で登場人物の気分になったり、片付中にふと窓の外を見ながら感慨に耽ってみたいと、私にとっては最高の居場所だ。

そうして一か月ほど経った頃、マスターがふと「そろそろ先生がいらっしゃる時期かねえ」と言った。

「先生、ですか？」

もしかして大学の教授の誰かが通ってるんだろうか。そのスーパーでゼミの先生と遭遇したこともあるしあり得るな。

「この近所に住んでいる方なだけけど、一定の間隔で通われるんだよ。その窓際が指定席だね」

席も指定してるの？　そういえば神経質で気難しい教授が近くに住んでるとか言ってたわけ。

その人だったら嫌だなと考えながらもやがてその日は記憶から消えた。

そして数日後。バイトに來た私の前に現れたのは、半開きの窓から差し込む夕陽に髪を梳かし、こちらを美の世界にいざなう神秘的な笑みを浮かべた

「柚菜ちゃん、この方が前に言ってた」

「風羽先生——っ」

まさにその人だった。

「えっ知り合いだったのかい？」

「えっ？ いえ……」

膝から崩れ落ち、生き別れの恩師と再会したかのような勢いで叫ぶ私にマスターも先生もちよっと引いていた。

でも仕方ない。憧れの作家に、作品の舞台とよく似た場所で微笑みかけられて正氣を保てる人はなかなかいないはず。

あと著者近影より千億倍は美しく神々しい。窓辺に絵画を飾り出したのかと思った。

「わ、わたし、先生の大ファンなんです。作品全部読んでます」

「えっ、そうなんですか。ありがとうございます。毎回このお店で執筆すると不思議と筆が乗るもので……しばらくお世話になります」

わ、こんな声でこうやって喋るんだ。少し低めで落ち着いていて本当にそよ風が耳をくすぐっているみたいだ。

私相手にも敬語を使ってくれて、それが初対面だからじゃなく人柄なんだというのが照れくさそうでいて優しい表情からも伝わる。

「このお店も、デビュー作に出てくるカフェに似てるなって……」

「実はそうなんです。マスターのご迷惑にならないようぼかしてはいるんですが、そこまでわかってくれたのは嬉しいな。ええと、柚菜ちゃんでしたっけ。これからよろしくお願いしますね」

「ふあい……」

こうして劇的な出会いを果たし、名前を覚えてもらい。

店を訪れるたびに、風に髪をなびかせながらパソコンに向かう綺麗な横顔を見守り、新作が出ればホットコーヒーがアイスに変わるくらい感想を延々と伝えて。

見かねたマスターに「邪魔しちゃダメでしょ」と怒られる日々を紡いでいるうちにいくつかの季節がめぐって、私も二十歳を越えていた。

新作が出版されて二週間ほどした頃、先生がやってきた。いつもに比べて来店ペースが早い。次作品の取り掛かりまで大体三か月は空いていたのに珍しいな。

「毎回席を占領して申し訳ないです。やっぱりここが一番落ち着けるもので、つい甘えてしまつて……」

「そんな、先生はお得意様なので気にしないでください！ 窓際は特等席としてご用意してますしそもそも混雑して席が埋まることもまずないので大丈夫ですつ。もちろん情報漏洩の心配もないですよ」

見ての通りガラガラだし、とマスターに聞かれたらゲンコツじゃすまないことを言いながら、同意に困っている顔の先生を指定席に案内する。

この席にはある種の縁を感じているらしく、よほどの強風や真冬じゃない限り先生は窓を開ける。

「デビュー作のアイディアもなんですが、僕のペンネームも実はこの席で閃いたんです。薄く開いた窓から風がふわっと羽根のように舞い込んで、優しい音を奏でて……聞いてみるとちよつと安直でしょう？」

そう照れ笑いをするけれど、ファンからしたら神生誕の地である。

きつとこの儂い美しさにつられて風の方から舞わせてくれとやって来たに違いない。

そんなオーラのある先生なのに、頼むものはいつもちよつと可愛い。

家にいるとまず食べないから、と恥ずかしそうにプリンやパフェをすくう姿を見るのは至福のひとつだ。

今日も来てすぐコーヒーを飲み、その後二時間ほどしてからフロートを頼んでくれた。

「あの、このあいだ出された短編集もとても良かったです。最後の話が特に、二人が海で再会するのが」

ちょうど休憩に入る感じだったのでここぞとばかりに感想を切り出す。

ちなみに先生の本を読んでから私の語彙力や文章力は爆上がり——というわけにはいかず、むしろ下がっていた。だって素敵すぎるんだもん。間近で話して思考まとまるわけがない。

言葉を司る先生からしたら、私の拙い感想など赤ちゃんと話しているのと同じだろう。

でもその喜びを噛み締めたようなはにかみが私の熱をさらに上げる。

「ありがとう、すごく嬉しいです。ネット上のコメントなどは時折拝見させてもらうんですが、普段あまり外に出ないので。こうして直接会って感想を伝えてくれるのは柚菜ちゃんが一番多いんですよ」

「ほっ本当ですか」

「はい。僕を支えてくれる大事なファンです」

こ、ここで働いてて……ううん、この地に住んで……もはや生まれてきて良かった。ぽわぽわしているところにマスターの咳払いが飛んできて慌ててカウンターに戻る。

「柚菜ちゃんが先生の大ファンなのはわかるけれど、お互いに仕事中。邪魔しちゃいけないよ」

「はい、ごめんなさい」

勝手にアイスを増量させたのは見逃してもらいながら、フロートを持ち先生のもとに向かう。

私の気配を感じたのかパソコンから目を離し、ニコツと微笑んでくれたその時、テーブルの上のスマホが震えた。着信だったらしく一瞬表情を変えて「ちょっと失礼します」とスマホを持って外に向かう。

アイス溶ける前に戻れるかな。とりあえず垂れても汚れないよう、トレイごと置こうと前かがみでメニューを寄せたため、たまたまパソコンの画面が見えた。

文字の並びからそれが作品に関する内容だとすぐに気づく。

……ダメダメ、大事な原稿なんだから絶対見ちゃダメ。

情報漏洩の心配はないと言っておきながら自分でするとか最低だしファン失格でしょ。

咄嗟に目をつぶろうとするも遅く、画面の文字が絵のように一瞬で飛び込んでしまう。

『赤く膨れた秘豆を弄ると熟れた匂いのする蜜壺からじわりと液が滲み出た』

その一文を脳に取り入れた以上、もう視線を逸らすのは無理だった。

秘……豆？ 熟れた蜜壺？ あっ、新作は料理に関する話なのかな？

あまりの衝撃になんとか作品に結び付けようとしつつ、無意識に次の文字も追ってしま
う。

『少しクリを摘まんだだけでもうこれか。トロトロと垂れ流して期待通りの雑魚まんだな』

……。栗に、トロトロ雑魚まん。うん、肉汁垂れる中華まんみたい。中華料理屋が舞
台かな。だな、うん。ねっ。

「ゆな……ちゃん？」

「つつっ!!」

無理やり自分を納得させることに精一杯で、電話を終えた先生が戻って来たことも、そ
して私と同じく絶望的な表情をしていることにも気づかず、声をかけられ思いっきり飛び
上がる。

その拍子に手が滑り、トレイの上のフロートが傾き、中身は全てキーボードの上へとぶ
ちまけられた。

時が止まるってこういうことだろう。実感している間に先生が素早く電源ボタンを押してパソコンも止まり、真っ暗になった。

ポタポタと零れたコーヒーが足に当たりやっとなにに返る。

「きやああああ」

私たち以外いなかった店内に悲鳴が響き渡り、「何事!？」と駆けてきたマスターを先生が制した。

「ちょっとごぼしちやっただけなので大丈夫ですよ。すみませんが拭くものだけお借りして良いですか」

途中で足を止めたのでマスターからは惨劇は見えなかったらしく、頷いてカウンターに走っていく。

でも実際はちよつとどころじゃないし、大事なパソコンの無残な姿が私の位置からハッキリわかる。

キーボードは全部コーヒーで浸かったうえに溶けたアイスまで染みこんで、これはもう修理とかの域じゃない。

「べ、弁償しますっ……いえ、させてください!」

「落ちていてください。これは外出時にしか使わないパソコンなので、失ってもそこまで

支障はないですから」

「でもっ」

「大打撃なのは僕がここに来てから打ち込んだ3万字程のデータが未保存だったことでして……」

遠い目をして乾いた笑いを漏らす先生に、加害者の私も眩暈が起きる。

お金なんかじゃ到底弁償できないものを失わしてしまったのだ。

「お詫びに何でもしますから！　だ……大事な次回作、の」

「え？　あ、ええまあ、確かに次回作ではあるんですが」

「クリと雑魚まん……中華料理屋のためにっ　んぐっ」

パニックのあまり頭に残っていた場面を叫ぶ私の口を塞いだ先生が、覚悟を決めた瞳で言った。

「柚菜ちゃん。なんでもというなら——　パソコンの弁償よりもっと、君に協力してもらいたいことがあります」

その後の記憶がないままバイトが終了し、私は先生に連れられてあるマンションの一室に来ていた。

確かに喫茶店からは程近く、一度通れば道順も覚えられるほどわかりやすい場所だ。

作風や先生の雰囲気からなんとなく四季折々の庭がある一軒家を想像していたけれど、白が基調のシンプルでシックな造りの部屋もこれはこれでイメージに合う。整理整頓がなされ、清潔感に溢れる空間に置かれた観葉植物も実に爽やかだ。

壁の一角に、日常生活では到底使わないタイトルの本が敷き詰められた棚が無ければ。

「まずはこれを見て欲しいんですが……」

憧れの人の部屋に在るというのに妙な汗が止まらない私に先生がいくつかの本を差し出した。

『盛りだくさん親子どんぶり 熟れ切った秘肉と瑞々しくたわわな果実の味わい』

『初めての爆乳搾り ご主人様の濃いミルクもたっぷり飲ませて』

「定食屋さんでの人情劇と牧場のハートフル物語ですか？」

どっちも大型動物を育てているのか、んほんほおと元気に鳴いてるな。

「認めたくない気持ちはわかるんですが……薄々勘付いてますよね」

現実逃避も含めてなるべく笑顔で返すものの、先生がバツが悪そうに咳払いをしたのでこっちも気まずさが増す。

そりゃアレを見たら勘付くというかコレを見たら確信せざるをえないというか……

「お察しの通りこれらの著者・自慰駆振射翔（じいくふりいと）と僕は同一人物です」
「うっ……」

でも現実を突きつけられるとやっぱ辛い。しーんと静まる室内がさらに空気を重くする。まず当て字の癖が強い。

「えーっと……さ、作品の幅を広くするために別名義で活躍とか、よくありますもんね」

とはいえ、これしきの事で先生を否定するなんてあってはならないことだ。私がどれだけの恩恵を受けたか、それを考えたら成人向けの一冊や二冊なんだというのか。

普段の先生からはあまりにかけ離れた文体だけど、それが逆にプロの手腕を感じるし。

「というか僕の本業はこっちだったんですよ。毎日淫語飛び交う生活に支配されすぎて親との会話でも口から出そうだったので、純粋な日本語を取り戻すために風羽舞音として全く違うジャンルに挑んだら反響がありました」

それはそれで有難いんですけど、とテレッとされ、なんとか保とうとしていた懂れがま

た揺らいだ。

あの瑞々しく美しい文章がうふんあはんほおの反動だったなんて……

細長い指でキーボードを叩く先生の尊い姿が、んほおほ鳴く動物に食べられ崩れていく。優雅な旋律にも聞こえた打ち込み音が奏でていたのが淫語のオンパレード？

「じゃあいつもあの席で、私たちのすぐそばでこういうことを考えてたんですか」

勝手にイメージを抱いて美化していたのは私の方で先生は何も悪くない。でもやっぱりちょっとショックだ。

ため息だけは出ないよう控えめに呟くと、先生が距離を詰め、私の手を取った。

「それは誤解です。僕は風羽と自慰軀を混同しないために、澄んだ心で作品を作りたかった。それが出来るのがあの喫茶店なんです。今日までに一度も、あの席で淫語を撒き散らしていたことはありません」

「わ、わかりましたごめんなさい……ん？ 今日までって」

「締め切りまで二週間を切っているのにどうもしつくり来るアイデアが浮かばず、場所を変えてみようとお店に行っただけです。すると背徳的感情の為か見事にひらめきがあり、あつという間に起承までは出来上がりました。が」

あとはわかりますよね、とでも言いたげに先生が微笑んだ。

はい、私が全て無に帰しました。

「本題に入りますが……柚菜ちゃん、自分にできることは何でもすると言いましたよね」

「……は、はい」

やばい。真顔で詰められると、美しさゆえに物凄い圧だ。責任取って編集部の前で全裸謝罪せよと言われても断れない。

「僕は今から脳をフル回転させてもう一度消えた分の構成を掘り起こします。その間に資料を探しておいてほしいんです」

「資料、ですか？」

「具体的には、この中から気になったプレイをピックアップして欲しい」

「プ……ピ……ィ？」

資料探したら全然苦じゃないとホッとしたのも束の間で、この中と指をさされたものを見て目が点になる。

「うら若き乙女にさせることじゃないのは重々わかっているんですが僕も本当に切羽詰まっています」

確かによほど切羽詰まっていなければ、地位のある先生が学生の私に山ほどの写真集やディスク、雑誌を見せたりしないだろう。

しかもプレイとのたまうだけあって、パッケージからして堂々とやばいブツですという風格を表している。ひとくくりで言えばSMっぽい。

「あの……一応お聞きしますがどんな内容の話になる予定なんですか？」

「マゾヒズムの気がある主人公が被虐趣味を持つ上司に弱みを握られ、倒錯の世界に目覚めていくというものです。初めての調教で上司に蔑まれ身体が反応し始めるところまでは出来上がっていました」

ああ、だからトロトロ……いや納得してどうする。

「私は調教の参考になりそうなものをピックアップすれば良いんですね」

「その通りです。テーマを決めて資料を集めたものの、全然目を通してなくて。なんなら柚菜ちゃんがされてみたいことでも良いですよ」

サラッとセクハラ発言な気もするが……そもその元凶は私だし、ここまで来たからにはきちんと働こう。これは協力という名の罪滅ぼしなんだから。

「では僕は向こうの部屋で作業してますので、何かあったら声をかけてくださいね」

あっさり別室に向かうくらい、先生にも他意はないみたいだし。

「それにしても理解が早くて助かりました。さすが僕のファンでいてくれただけある」
なんだろ、さっきより嬉しくない。

隣の部屋から響くキーボードを叩く音を聞きながら、覚悟を決めてまず写真集をめくってみる。

倒錯の世界観にふさわしく、ちよつと痛そうな構図が続く。

S Mとしては定番の鞭で叩かれたりロウソクを垂らされたりするのは私にはちよつと厳しい。うつすら血とか滲んでるじゃん、無理むり。

特に惹かれるものが無いと感じ、パラパラと写真集を見送って次に雑誌を手取る。

こっちも初めてのS M講座とか従順な犬にする方法とか無理む……いやこれはこれで気になるけど、痛みがまずインプットされてしまい快感に繋げるのは想像でも難しい。

もし私自身が、期待に震えてトロトロするほどの悦びを感じるとしたら――

「ん？」

『最強の快樂責め特集！ イッてもイッても終わらない無限のアクメ地獄』

なんかすごいの見つけちゃった。

地獄というフレーズがやや引っ掛かるものの、痛みとは一味違いそうなので恐る恐る特

集ページを読んでみる。

写真の女性は磔の如く手足を大の字で拘束されていた。これもSMの類かと思いきや、違うのはその身体に触れているものだ。

肌を覆っているのは蠟の塊じゃなく無数のローター。秘部に食い込んでいるのはコブ縄の代わりにバイブ。

汗ばんだ肌が赤くなっているのは鞭打ちの痕ではなく、彼女の興奮と身体の反応の証。何より、表情が全然違う。とめどなく涙が溢れ、涎も鼻水も垂れている。

苦しそうではあるけれど、確実に快感で歪んだ顔だった。

「……」

その雑誌だけ違う場所に置き、いよいよ積み重ねたディスクを手にしパッケージを端から確認する。

そして今の雑誌の女性と同じ顔をしているものを選んだ。

自由を奪われた女性の全身に、男たちがさわさわと指を這わせ、ツーツと爪を滑らせていく。

俗にいうくすぐりだけど女性は全く笑ってない。乳首を転がされると眉を下げ、秘部をなぞられれば口を半開きにして身をよじっている。

気持ち良いんだ。ゾクツとしてつい見入ってしまったものの、挿入シーンに変わると途端に大きく喘ぎ出したので我に返る。これは演技だな。

もう一枚はスパイが敵に捕まり尋問を受けるというありがちな内容だった。

乳首を摘んで先っぽをこすられ、ローターでクリを潰しながらナカをバイブでぐちゅぐちゅとかき回されていて思わず息を飲む。

もし同時にこんなことされたら――

不意に足を動かしたその時、自分の身体の違和感に気づいた。

えっ、やばい。濡れてるかも。

こんな他人の、しかもずっと憧れていた先生の部屋で

「良さそうなものありました？」

「きゃああああああ」

不意に耳元にそよ風が吹き込み、心臓が止まるかと思った。

またしても盛大に悲鳴をあげ、積まれた物を片っ端からなぎ倒した私を見て先生が苦笑する。

「せっ先生、もう終わったんですか？」

「いえ、まだ導入部分までなんですが、柚菜ちゃんの意見によって展開変更もあり得るの

で様子を見に来ました。何か気になるのは……ああ、あつたようですね」

崩したものと逆の位置に置いてあつた雑誌とディスクを見つけた先生が薄く微笑み、カッと頬が熱くなる。

「ほ、本当に少し気になっただけで先生の書こうとするものとはズレてるかも」

「どんな些細なことでも構いませんよ。どこに目を引かれたのか教えてください」

「わ、私痛そうなのはちょっと苦手で。でもここにあるのはそういうのじゃなくて……本当に気持ち良さそうなんです」

「と言いますと」

いつのまに持ってきてたのか、パソコンを広げて私の発言を待っている。

「くすぐりも、笑わせるためじゃなくて鳥肌立つような触り方してたり」

「ふむふむ」

「何度もイカされて泣きわめいても止めなかったり……でも最後にはもっとしてって女性の方から言ってる」

「ほうほう」

アホみたいな感想をまばたきもせず高速で打ち込んでいく姿は普段の優雅な物腰と大分違うけれど、迫力が半端ない。

「快樂責めって……そんなに気持ち良いのかな」

しまった。なんか意識したみたいと言っちゃった。慌てて取り消そうとした私より早く先生が「閃きました!」と叫ぶ。

「内容を大幅に変更します。主人公は性への好奇心が強い大学生。それを知人の官能小説家に見抜かれくすぐり責め快樂責めで連続絶頂のイキ地獄を味わう話にしましょう!」
凄いなこの人。この儚く美しい顔でよくどこまでの単語を並べられるものだ。

日常生活に支障が出るレベルの淫語に脳が支配されていたというのもなんか納得する。
ところで今の登場人物設定、何か引っかけが――

「あのー、し……資料探しが済んだなら、私はもう帰ろうかなーと……ヒッ!」
これ以上ここにいたらまずい気がする。

作り笑いで誤魔化して立ち上がりとした途端ガシッと腕を掴まれた。

「柚菜ちゃん」

「は、はい」

「実践に勝る資料はないんです。それをしながらプロットを作れば効率も良い。作品モデル、お願いできますよね」

「モデルって……せ、せ、先生が私に快樂責めをするってことですか」

「はい。そしたら柚菜ちゃんも疑問の答えが出るしメリットは十分にあるでしょう」

憧れの人の裏の顔を知った上に身体をさらすとか、デメリットの方が大きいんですが、いやいや、となんとか首を振ると、先生がボソッと呟いた。

「二十二万三千円」

うっ……聞き返さなくても何の値段かわかる……その分は身を挺して働けと圧がかかってくる……

「それに柚菜ちゃん……濡れてますよね」

「なっ！」

「反応ひとつで十分にわかりますよ。僕小説家なので人間観察は得意な方なんです」

そんな人の股間見ながら言われても……

けれど先生の言うとおり、さっきから沸き始めた欲と熱が身体を疼かせているのは事実だ。

咄嗟に隠すように膝の上に手を置くと、先生は勝利を確信した笑みを浮かべた。それは私の心の奥を見透かすものだった。

「君の好奇心を満たし、作品に活かせるよう僕も精一杯頑張りますね」

こうして特に抵抗することもなく、作品のモデルになることは了承した。したけど

「あの、先生。なんで私、こんな格好してるんでしょうか」

早速ベッドに仰向けで転がされたうえ、両手首にテープを巻かれて動けなくされてるってどういうことなの。

「起承転結の起ですよ。作家の家で初めての調教が行われるとても重要な場面です」

気合が入って当然だとしても言いたげに語り、多分私の様子をカタカタ打ち込んでいる。

「確かにモデルのことはOKしました、でもその、くすぐりとかき……気持ち良いかが気になるからで、拘束とか痛いのは嫌なんですけど……」

「大丈夫ですよ。痛い思いはさせません。今はテープを使っていますが作品内では麻縄の予定ですし、あくまでポーズの参考です」

その言葉に安堵し、ひとまず安定を保とうともぞもぞ動く。

「でもね柚菜ちゃん。動きを封じるといいうのは興奮材料のひとつなんです。抵抗できない状態で自分の身体を弄りまわされ、惨めに喘ぐだけ。逃れられない恐怖が快感に繋がる。あの女性もそうだったでしょう」

確かに動けないからこそ余計に気持ち良さそうだった。

もし私も今の状態で触られたら……

さっきの映像がよぎりドキドキしていると、先生がベッドの縁に腰かけ、スッと私の膝あたりを指さした。

「これから自分はどうなるのか。わずかな不安を上回る期待で柚菜の肌は熱を帯び、しつとりと汗が滲み出ていた」

「へっ？」

「近づく指先をじっと見つめ、早く心の内も欲も暴いて欲しいといじらしく膝を擦り合わせている」

「何言って……」

「モデルとして、とても参考になる振る舞いをしてくれて助かります」

心の声を言い当てられたかと思っでドキッとした。でもそれ以上に、先生は私の反応を見抜いていたらしい。

慌てて足元に目をやると、言葉の通り膝が触れ合っていて顔に熱が集まる。

「なっ、名前……私の名前じゃなくても」

「そこはモデルですから、名付けるまではお借りします」

なんか私自身の観察をされているみたいで羞恥心が増す。

でも先生は受け流し、あろうことか身をかがめて耳元で「柚菜」と囁いた。

「っ」

「名を呼ばれると駭を受け始めたばかりの子犬のようにおずおずと主人の顔を見上げた」
暖かい春の風が氷の刃に変わったみたいで鋭い声音についてビクッとして身を正してしま
った。今まであれだけときめいた声に威圧にも似たものを覚えるなんて。

「再度言いますが無理強いや苦痛を与えることは絶対にしません、反応を見ながら進めま
すから」

「や、約束してくださいね」

「もちろん。……本当に、嫌そうならね」

「え？」

「いえ、では今度こそ続きを」

まな板の鯉のように横たわる私のお腹のあたりに、先生が膝を立てて跨る。

下から見る角度もめっちゃくちゃ美形で、状況を忘れ思わず喉が鳴りそうになる。

でも今そんなことしたら期待と取られるのは間違いないので我慢し、代わりにそっと目
を逸らした。

「恥じらいを思い出したのか唇を震わせ視線を外す」

もうネタにされてる……。いちいち口に出すのはやめてもらいたいけれど、これが先生のやり方なら仕方ない。

「作家の指先が最初にたどり着いたのは彼女の耳だった」

自分の行動も口にするの？ それじゃただの実況では……

別の意味で戸惑っていると先生の指が実際に両方の耳のふちを摘み、くしゅくしゅと動き始めた。指先をぼしゅつとくぼみに落とし、音を立てて前後に出し入れする。

「んっ」

「くぐもった音の中、かすかに混じる快感が柚菜の欲を引きずり出す。思わず上げた声には既に悦びが混じっていた」

「そ、んなことないです」

慌てて見上げると先生がフツと微笑んだ。

今の反論を取り入れなかったのは、物語には必要ないということだろう。

「次の場所へと向かう指が首筋をなぞり、二の腕の内側に狙いを定めた」

「っ」

「触れるかどうかの絶妙な位置で、肘上から脇にかけてさわさわと行き交う」

「あ……」

「吐息には熱がこもり、無意識に身をくねらせている。まだ気恥ずかしさが勝ち、作家から視線を逸らした」

思わず目をつぶると、先生がそれもレポートのように告げる。

そして脇の付け根に触れた指先がカリッとくぼみを引つかいた。

「今まで友人らと戯れに触れ合った時とは違う奇妙な感覚に鳥肌が立つ。震えながらその違和感に耐えていたが……」

「んっ、くっ」

「乳房の形をなぞった瞬間、その感覚が顕著に表れた」

今度こそゴクンと息を飲むのと同時に、先生がカットソーとキャミを一緒に鎖骨のあたりまでまくり上げた。

そして自分でも驚くことに背中に手を差し込まれた瞬間、無意識に身体を浮かせてしまった。指摘される、と身構えたけれど先生はニコニコと笑っている。

「ふふ……協力ありがとう」

「っ！ モデルとしてしかたなく、です。パソコンのこともあるし」

「そうですか？ じゃあこっちも遠慮なく」

ごまかしが利かないほど上ずった声の私とは正反対に、落ち着いた動きで難なくブラの

ホックを外す。

数時間前まで神と崇めるほど憧れだった人の前で胸丸出しって、何やってんだろ私も。

「意外と着やせするタイプなんですね。乳首も色素が薄く摘まみやすそうな形だ。白い肌に淡い桃色がぷくつと浮いていて、実に絵になる」

「そっ、それ作家のセリフですよ？　じゃなかったらセクハラにもほどがありますよ」
「さあ。どうでしょう」

問題発言とは裏腹に上品に笑って、指先をお腹の方に滑らせる。てっきりこのまま胸に触れられると思ったから、少し拍子抜けする。

しばらくゆるゆるとお腹を撫でていた手が横へ動き、脇腹を爪の先でなぞり始めた。

柔らかい指の腹だとマッサージみたいにも受け取れるけど、爪でひつかかれるとぞわぞわ感が増す。

「はあっ……、んっ」

「気になると言っただけあって、くすぐりに弱いんですね」

「わかりませ……」

「じゃあ試してみましよう」

え、と戸惑う間もなく両手が伸び、さっきよりも激しく指が動かされる。

「だけどこちよこちよと笑わす類のものじゃなくて、指を浮かせてもどかしく撫でまわしたり引つかいたりとか快感を引き出すやり方だ。」

「やっ、ちよつとま……」

「全体的に脇が弱点なのかな。くぼみから腰元までスーッとなぞると、ほら」

「あっ、んんっ」

ひととき大きな刺激で反射的に横を向くと、先生が「あ、良い体勢ですね」と背中にも手を当てた。

そしてお腹と背中を同時にくすぐられ一気に全身が総毛立つ。

たまらず身をよじったその時、爪の先がちょうど乳首を掠めカリッと引つかかれた。

「あうっ」

「ふふ、待ちきれなくなっちゃいました？」

「ちがっ」

偶然なのに、自分から当てに行つたみたいに思われるのが嫌で慌てて首を振る。

すると先生が私を仰向けに戻し、拘束した両手を頭の上に持っていた。

「第一の山場ですから、暴れずにしっかり努めてください」

「……………」

穏やかな口調で圧をかけ、谷間から膨らみに向かってさわさわと指を動かす。

なんだか虫が肌を這っているようで不気味だ。でも嫌悪感よりも圧倒的にもどかしさが勝つ。しかも思わせぶりに周りばかりを責め、中心にはたどり着かない。これも物語の重要なポイントなんだろうけど、実際にされると結構辛い。

「いつの間にか唇が薄く開き、小さな吐息が耐えず漏れている。それが――」
「くうんっ」

「胸の頂を捉えたたん、確かな色を持った響きに変わった」

指摘された通り、さっきよりもさらに強い快感が走り抜ける。違うのは、それが継続し始めたことだった。

人差し指の爪が乳首をカリカリと何度も引っかく。くすぐるよりも強い力で、その分快感も大きい。

「薄紅の突起は今や固く尖り切り、いかにも弾いて欲しそうに身を突き出している」

「ふっ……」

「時折指で押し込みこね回してやると、たまらないと身体をひねって喘いだ」

「んっ、あ、う」

「しかし柚葉が快感に身を投げ出そうとすると、作家はわざと指を別方向へ滑らせもどか

しく肌をなぞる」

先生、まさか楽しんでないよね。

ジンジン痺れる乳首を放って肩や腕をなぞられ、ちよつと恨めしさまで沸いてきた。

「やがてその手がさらに下に向かい、太ももを撫であげる。ゆつくりと」

「わーっっ！」

「わっ、……ど、どうしました？」

「お願いですから、その観察記録みたいな言い回しやめてくださいっ」

さすがに耐え切れなくなり抗議の声をあげると、先生は「はあ……」と困った顔をした。

「口に出した方が頭に残るので、のちのちの構成もしやすいんですよ」

「そうかもしれないませんが、淡々と解説されるとなんだかモデルというより実験体みたいだし、このあとおっぴろげた柚菜の股はめちやくちや濡れていた的事実的なこと言われるのが目に浮かぶんです！」

「そこまで短絡的な表現はしませんけど……。けれどモデルとして感情移入出来ないというのは問題ですし、わかりました。構成の練り方は考えますのでもう少し付き合ってください」

「それなら、いいです……」

言い回しを変えてくれるという提案にひとまずホッとする。

これこそが間違いの元だったと気づくのこそ時間がかからなかった。

仕切り直しとばかりに、先生が私の両膝を曲げゆつくりと開脚していく。

濡れていることはお見通しだろうけど、マジマジと見られるのもかなり気まずい。

けれど必死の訴えを聞き入れてくれたらしく、何も言わないままそつと下半身に指を這わせ始めた。

まずは下腹部や内ももを指の腹でくるくるなぞられたりさわさわとくすぐられる。

時々焦らすようにショーツの縁と肌の合間を爪で引っかかれ、ビクツと腰が浮く。

何度目かの往復の後、指先がちょんと弱点に触れた。

「あっ」

目的地を当てたみたいそのまますりすり上下にこすられ、じわつと熱い痺れが広がっていく。

「柚菜ちゃんの可愛い粒、すぐ見つかりました。下着が濡れてびったり貼り付いているから形もよく目立ってます」

お腹をへこませて耐えていると、指を押し付けしゅるしゅる撫で回す動きに変わり、そ

のたび脳に送られる快感も増す。

「どんどん固く膨れてきてる。もつと触って欲しいのかな」

「そ……いうの、言わないでってえ……」

「観察記録が嫌なんでしょう？これは見たままの感想を僕が喋ってるだけですから」

なんか屁理屈言ってるう……

「ふふ、可愛いからたくさんくすぐってあげよう」

「えっ……っ あ、やつ、そんな」

ピタッと二本の爪先を並べて添え、交互にカリカリと動かす。固い爪にクリが引つかかって、さすがに声も我慢できなくなってきた。

「あっ、あ……っ！ んんっ」

「ぬるぬるしたのも滲み出てきて、そろそろ僕の指まで濡れちゃいそうだな」

「んっ、くうっ、あっ、……ひゃっ……！」

執拗にクリの真上ばかりひたすらしくすぐられて、先生の言ったように愛液が染みしてきたのか爪がちゅるんと滑った。そのビリッとした刺激でも腰が跳ねてしまう。

「どれだけ染み出てくるか、ちよつと絞ってみようか」

そう言ってショーツごとクリの両端を挟んでふにふにと揺らされ、果物を潰したみたい

に膾口からじゅわじゅわ愛液が漏れるのがわかる。

「うん、瑞々しい美味しそうな汁がたくさん溢れて来ましたね」

今まではどこか信じられない気持ちが残っていたけど、これで確信した。

この人変態だ。しかもドがつく。こんなことで感心したくないけど自慰駆振射翔先生の名は伊達じゃない。

「こんな鼻息の荒い先生なんて知りたくなかったあ……」

「うーんそのセリフは却下ですね、柚菜はそれ以上に変態少女なので」

「わたしのどこがっ」

「小説の主人公のことですよ。クリをカリカリするだけでこんなびしゃびしゃにしちゃった挙句、あっけなくイッちゃう子なんです。淫乱で変態以外の何物でもないでしょう？」

反論する私にわざと目を合わせてニコリと微笑み、ショーツの縁をずらしてクリを直接指でぐにぐにとこねてくる。

「あぁっ、……っ、んっ、きゃんっ！」

ぐりんっと大きく潰すように指を押し付けられ、とうとう昇りつめてしまった。

「……おや、どうしました？　もしかして柚菜ちゃんも今のでイッちゃったとか？」

いけしゃあしゃあと……と睨んでも、これじゃ何の説得力もないだろう。

「くすぐられて嬉しかったのか、クリを弄られること自体が好きなのか……柚菜はどっちなのかな」

それは主人公のこと？ それとも私……？ 答えあぐねていると先生が前屈みになり、胸元に顔を近づけた。

「参考のために調べてみない？」

「な、舐めるのは関係なくないですか!？」

「くすぐりって指を使うだけじゃないですし」

ぬるっとした舌先が肌を滑ってなんともいえない気持ち良さが走る。

乳首をちよろちよろと舌先でくすぐられる感覚に酔っていると不意に秘部にもザワツと快感が走った。

「こっちも忘れてませんから、安心してくださいね」

「ひゃっ!」

ちゅぽつと乳輪ごと吸われ、抗議の声が嬌声に変わってしまう。

すぼめた口の中で乳首をつつく舌と、割れ目を下から上へと何度も撫であげる指。

どちらにも意識を引く張られ、頭の中がまた真っ白になっていく。

「んあつ、やつ、ひっ……うう……っ」

つま先を丸めて耐えていると先生がショーツを脱がせ、遠慮もなくソコを覗き込んだ。

「っ、や、何するんですか」

「何って、この濡れそぼった甘い汁の出どころを舌でくすぐったらどうなるか確かめるんですが」

「そ、そんなのやめてください」

当たり前のように舌を出され慌てて足を閉じようとするも、その前に膝を押さえられてしまった。

例えド変態でもこんな美の化身に秘部を舐められるとか、完全に許容量を超えている。

「心配しなくても大丈夫、クンニなんて定番の定番じゃないですか」

「自慰駆先生の物差しで言われてもっ」

「今の状態で行えば、驚くほどの快感を得られるはずですよ。ほら、このヒクついてるビラビラしたところ」

「やあっ、見ないでっ」

「まずここをぺろぺろと丹念に舐めていって、今よりもっと柔らかくトロトロにしたら、この皮の中から小さな粒を舌ですくいだして」

「っ……」

「愛情を込めて口づけた後は、優しくくすぐるんです。気持ち良いと思わないですか？」

「あ……」

「じゃ、やってみましょうね」

「えっ！　ちよつとまっ……」

人がまだ葛藤してるというのに、先生は私の太ももを思いつきり開き顔をうずめた。

吐息がかかるのがわかって変な汗までかいてしまう。手を拘束されているせいで起き上がれず、震えながらこの後訪れるだろう衝撃をただ待つしかできない。

「ひっ！」

やがて想像よりもはつきりと、柔らかくぬめつとした生ぬるい感触が秘部を襲う。

割れ目のヒダを膣口の方から少しずつ少しずつ舐め這い上がっていき、恥骨にたどり着いたあと、また反対側へと下りていく。

「はっ……う、ああ……っ、やあ……」

さつきまでのようにチロチロとくすぐるのかと思いきや、舌尖を押し当てぐにぐにとこねながら動いていくのでまるで蛇のうねりみたいだ。

信じられないほど気持ち良くて、握っていた拳が開き、拘束された腕ごとベッドに力なく沈む。

「ん、ふ……っ、っあ、ひあ……」

生理的な涙が浮かんできたその時、親指でくいつと皮を剥かれ、顔を出したクリに先生がちゅうっ……と唇を当てた。

表現するならとても優しいキス。それなのに神経をやすりで擦られたような鋭い快感が走り抜けた。

「やああっ！」

反射的に身をよじろうとしたものの、腰をがっしり抱え込まれる全く動けない。細身のくせに何この力。変態の底力？

待って、言っていた通りならこの後って……

「まだこれからですよ。可愛い粒を舐めてツンツンして、いっぱいくすぐってあげますからね」

絶望的な宣言に震える私を落ち着かせるかのように、ちゅ、ちゅつとクリへのキスを繰り返した後、無情にも剥き出しのソレを唇で挟んだ。

「うあああっ、や、待ってえっ」

「大丈夫ですから、怖がらないで力を抜いて」

「いっ、そこで喋らないでえ……っ、あっ、あっ、や……っ」

唇の間でくにと力を加えながら、さらに膨れてきたところを舌でツン、ツン、と戯れにつつく。

「やだあ、それやめてえ……やっ、だめ、あうっ」

「お気に召さないかな？ やっぱりぺろぺろチロチロくすぐる方が好きですかね」
「つつんいいっ！」

いきなりベロンツと大きく舐められた後、子猫がミルクを飲むように小刻みにぺろぺろされる。かと思うと爬虫類の舌なめずりみたいに舌の先でちょろりとくすぐられる。そんなことを繰り返され頭がぼーっとしてきた。

「んあ……あゝっ、あっ、らめ、やだ……っあ、ああ」

「こっちの方が好みでしたね。ヒクヒク震えて、甘いお汁がたくさん出てきてる。これを固くなったクリちゃんに絡めて転がすと、まるで飴玉を舐めてるみたいですよ」

「ひうっ、うあ、やめ……っ！ やっ、やあっ」

溢れ出た愛液を舌ですくってクリに塗りたくり、そのままゴシゴシとしごかれ、目の前にいくつも星が飛ぶ。

「あう、うっ、ひ……っい、あっ、やだやだ強いやだ……っあ、あああゝっつ」

キラキラ光っていたそれが、ちゅぽぽと強くクリを吸い上げられた瞬間勢いよくはじ

けて散った。

「うんっ……くう……」

身体全体が引きつるほど激しくイッたせいか呼吸がしにくい。短く息を吸い、なんとか息を整えたその時、新たな衝撃が駆け抜けた。

「やーっ、なにしてるんですかつ」

「お汁が溢れ過ぎていたので少し吸い取らないと、僕が窒息しちゃうかも」

だ……ダメだこの変態、レベルが異常値を振り切ってる。

膣口にびたりと唇を合わせ、じゅるじゅると音を立てて愛液を啜る姿にゾツとする。もう美の化身でも神でもない、なんかの妖怪に等しい。

「あっ、あっ、やめてええっ！」

じゅちゅうっ！ と生ぬるい口内に敏感な神経を吸い込まれる未知の快感に恐怖すら覚えていると、とどめを刺すように割れ目の合間に舌が差し込まれた。

「あーっ！ だめだめえ!! やだってばああ」

「吸っても吸っても追いつかないし、かき出してみようかと」

「おかしいっ、あっ、やああっナカ舐めないで、やらっ、いつ、いやああーっ」

忍び込んだ舌先がちょうどクリの裏筋を捕らえた瞬間、激しく抜き差しされる。

さつき飛び散ったはずの星が一気に視界に舞い戻り、また派手に爆発した。

「うーん。あんまり意味なかったかな」

べちゃべちゃの口元を拭いながら憎たらしいことを呟いた先生が、腰を押さえていた手を太ももの方へ滑らせる。次に何をされるか理解してしまい、きゅっとお尻をつぼめたのがバレたのか「期待しちゃいました？」と笑われた。

「……別に」

「ふふ。答え合わせしましょうね」

ぐぶぶ……と二本の指がすんなり飲み込まれていく音で、答えが一致していたのが嫌でもわかる。

「凄い量ですね。あれだけ流れ出たのに、もう押し戻されそうだ」

「んっ」

再び溜まっていた愛液をかき出すように膣壁の中で指をくねくね曲げながらあちこちをこする。もちろん余計にナカがうねり、あとからあとから気持ち良さの波が押し寄せるだけで何の堰き止めにもならない。

「んううつ、いつ、んふつ、ああっ」

「このザラザラしたところに掴まったら流されないかな？」

「んくっ、あ、ああっそこ、だめ、だめ……っ」

「ああ、やっぱり。たくさん溢れてくるけど、その分きゅうつと締まって僕の指を離さないでいますね」

「あゝっ！ もっ……む、りい……っ！ んゝっ」

熟練の冒険者みたいに的確にGスポットを探し当て、愛液の海に溺れまいとフックの代わりに二本の指を引っ掛ける。そして丈夫さを調べるためタンタンとリズムよく指で叩いたり押しつけて震わせたり。

「……っ、ふえ……っ、え……うあ……」

あまりの快感に意識も飛びかけた頃、神経に直接針を刺されたような鋭い刺激がクリから脳天へ突き抜けた。

「ひぐっ、いやあっ!!」

バチッと目を開けて下を見ると先生がクリを摘まんでこれでもかと引っ張っていた。

「寝ちゃだめですよ。僕が甘いお汁の海で溺れないよう、しっかり締めて捕まえてくれないと」

グイグイとGスポットを押し上げながら、引っ張って放られジンジン痺れるクリの表面を小刻みに引っかかる。

「んいっ!! うあつ、あつ、やめつ、むり、むりいっ……やーっ」

ぐぐつと勝手に背中がのけ反り、また目の前に火花が集まりだしたその直後――

ぐちゅぐちゅ水音の演奏をびたりと止めるみたいに、両手がそれぞれの動きを速め、Gスポットもクリも同時にグリッと潰した。

「あーっっっ」

――プシュッ

溺れて窒息というのも一理あるかもしれない。それくらい勢いよく潮を吹きだした膣口から、びしょ濡れの指が引き抜かれる。

「少し休みますか？」

何も言わなくなりぐったりベッドに沈んだ私をさすがに気遣ったのか、先生が心配そうに首を傾げた。一応良心を兼ね備えた変態ではあるらしい。

「……まだ協力が必要なら、我に返る前に済ませちゃいたいです」

「良かった。貪欲な柚菜ならまだ余力があると思いました」

だからどっちの柚菜の話？ 問いかけられないまま、先生が引き出しに手を伸ばすのを見つめる。

「最後はこれを試しましょう。快樂責めには欠かせないアイテムです」